

(株)真明機設
代表取締役

PICK UP

THE PERSON

真貝想

KEY WORD

天職

— tensyoku —

多くの経営者は修業を終えてから独立するもの。
しかし真貝社長は独立後も「さらにスキルを伸ばしていきたい」と、
休む間も惜しんで仕事に没頭し、仕事のノウハウを身につけていった。
そして仕事で得たお金で新しい道具を買い、またスキルアップにつながるものが、
モチベーションとなったと、機械器具設置工事が天職という社長は語る。
「『好き』という気持ちが原動力となり、高みを目指すことができたのです」
——
そして「まだまだ道の半ば」と、貪欲に吸収し、道を切り拓いていく構えだ。
常により高みを目指す強い意欲と探究心で、社長はさらに成長を重ねていく。



「『この仕事が好き』との思いこそが
上達への大きな原動力なのです」

仕事への強い愛着と意欲で研鑽を重ね さらなる高みを目指す求道的な経営者



真貝 想

代表取締役

株式会社 真明機設

新潟県長岡市信濃2丁目14-29

One Point Column

「子どもが主役で自分は脇役」と
我が子を中心に励む喜び

▼「私は長く自分が中心で、自分の好きなように生きてきた」という真貝社長。しかし子どもが生まれてからは「あくまで子どもが主役で自分は脇役」と、子どもたちを中心に人生を考えるようになった。これまでは「好きな仕事に携われる」ことが第一義だったが、今では自分が仕事に励むことが子どもたちのためにもなるとの想いが、大きなモチベーションとなっている。

▼元々は「子どもには継がせたくない」と考えていた事業についても、法人化を機に、我が子への継承を期待する気持ちが芽生えたという。「これからは父親としても仕事の上でも、子どもたちに格好いい背中を見せていかなくてはなりませんね」——我が子の姿が浮かんだのだろうか、そう言って社長は、優しい笑顔浮かべていた。

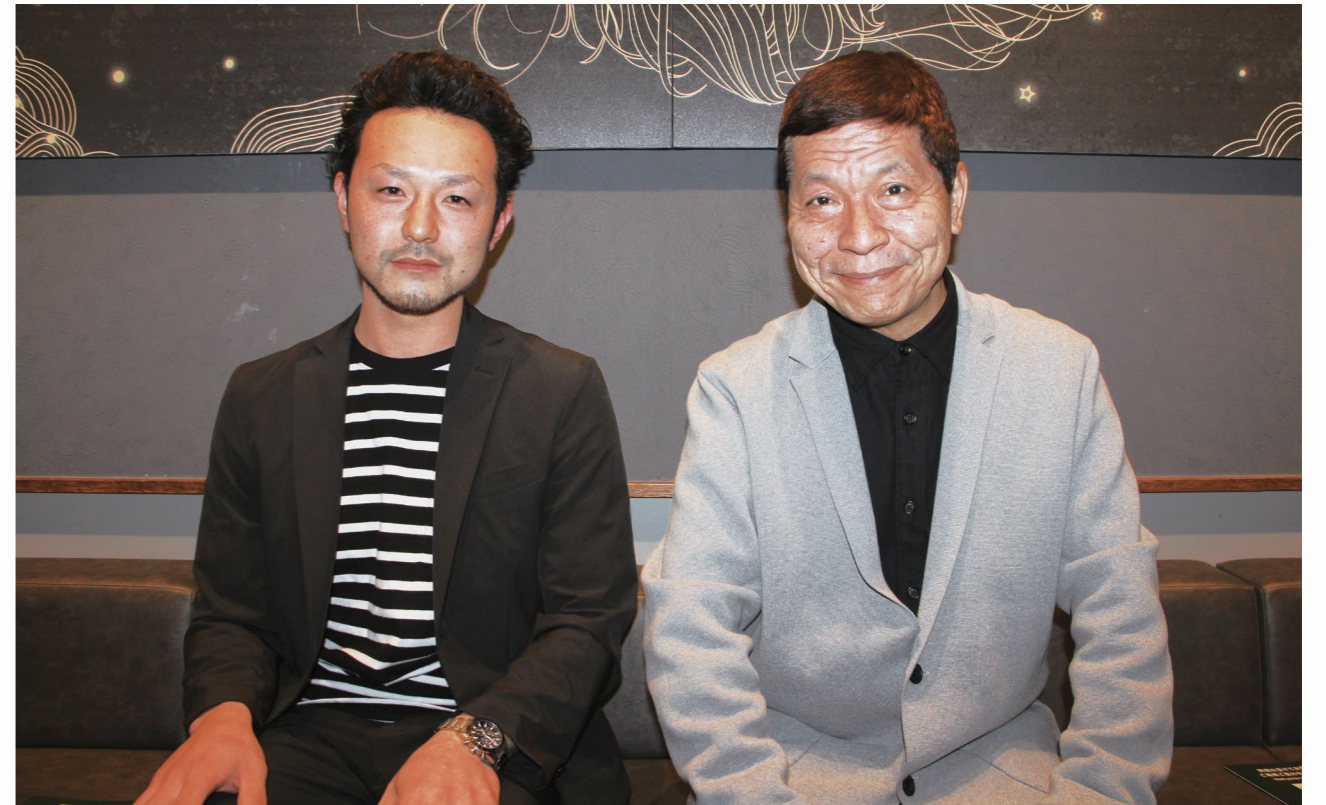
——社長は本当に求道的な方ですね。今後については、どのような展望を描いておられるでしょう。

建設業界であれば業種にかかわらず、何か一つ仕事を覚えると別の業種にも応用が利くもので、基本的なところを覚えれば別の業種は手法や使う道具が違うだけで要領は一緒です。とは言え、人生には限りがあり時間も有限ですから、私一人が全ての分野を覚え、全ての建設許可を取るのはいくらも難しいですね。そのため、今後は、色々な建設許可を持っている人たちと一つのチームを作るのも良いのでは、と考えています。また、私はこれまで仕事に没頭する余り、家庭を蔑ろにしていたと感じます。法人化を機によりよく家族と向き合う時間を作れるようになりました。家庭が大事だとの認識を持ちつつ、働くことが経済的に子どものためになるとの想いで仕事に励んでおり、それがやりがいにつながっています。好きなことを仕事に、やりがいを感ずる喜び、家庭を守る。そして子どもの成長が仕事のやりがいにつながる——この原動力を大事に、仕事を続けていきたいと思っています。

また、当社では「やってみせ言ってみせて」で始めてやらねば人は動かし、で始まる長岡市の先人・山本五十六の言葉を社訓にしています。この言葉を胸に、人を大事に歩んでいく所存です。

——とても素晴らしいお考えです。最後に、今後一緒に仕事をされる次世代の方々に向けたメッセージをお聞かせ下さい。

私にとって、この仕事は非常にやり甲斐があるもので、まさに天職だと思っています。仕事を選ぶ時、その仕事が好きか嫌いかはとても大切な判断基準です。仕事を覚える速さといった成長のスピードは置いておくとして、「好き」な気持ちがあればその気持ちの分だけ伸び代となりますから。私も若いころは仕事の覚えが遅かったのですが、「仕事が好き」との気持ちが原動力となり、高みを目指すことができましたから、その部分を大切にしたいですね。とは言え私自身、まだまだ道の半ばであり、今後も貪欲に吸収し、道を切り拓いていかなければなりません。ですから私自身が若い世代と一緒に励み、共に成長していければ、と考えています。



新潟県長岡市で、機械器具設置工事を主とした工事業を手掛ける「真明機設」。主にプラント設備・運送機器設置・内燃力発電設備・集塵機器設置・給排気設備設置などの工事を手掛けている同社の真貝社長。15歳から職人として建設業に携わり、「物が残る」機械設置の仕事に魅力を感じて独立。2020年4月に法人化を果たし、細く長く継続できる会社を目指している。本日は社長のもとをタレントの松尾伴内氏が訪問し、インタビューを行った。

——「真明機設」さんでは機械・重量物の運搬・据付・メンテナンス、各種プラント工事などを手掛けておられるそうですね。まずは真貝社長の歩みから伺います。

15歳より職人として建設業に携わり、人生の約半分を職人として生きてきました。最初は仮設足場の仕事から始め、やがて、高速度の橋桁を掛ける仕事の中で、機械器具設置工事に従事。工事が終わると形として残らない仮設足場に対し、こちらの仕事では、自らの手で据付した機械が後々まで残ることに喜びとやり甲斐を感じました。そして「この仕事を続けていこう」と決意を固めたのです。

——その後、どのようなタイミングで独立をされたのでしょうか。

自分で事業を手掛け、もっと高みを目指したいと独立したが23歳のころのことです。ただ独立後も修業は続けていて、場数を踏むため休む間も惜しんで仕事に没頭していました。当時はもっと吸収したい、より早く技術を身につけたいとの思いでしたね。そうして修業する中でお金につながるものが嬉しく、得たお金で道具を買って、それがまた仕事の向上につながっていくことへの充実感がありました。私は本当にこの仕事が好きですし、自分にとって仕事は最大の趣味でもあるのだと思います。

——そこまで仕事を好きでいられる人はそうはいません。幸せなことですね。

そして約7〜8年の個人事業を経て、2020年4月に法人改組しました。世の中がコロナ禍に陥り、緊急事態宣言の最中に法人化に踏み切るのは勇気の要ること。それを敢えて行ったのは、業界全体が岐路に立たされるであろう中で攻める気持ち

を忘れないことで、ピンチをチャンスに変えたいと思っただけ。当時は新型コロナウィルスについての説明も進んでおらず「死ぬ前に何かを成し遂げ、自分の生きてきた跡を残したい」との想いもありました。

——コロナ禍の危機が、新たなチャレンジを決心させる引き金になった訳だ。御社の強みはどのような部分だとお考えですか。

私はまだまだ駆け出しですが、強みと誇れるようなものはありませんが、大切にしているのは人と人との縁やつながりです。会社同士のお付き合いも結局は人間同士の付き合い合いですから、人を裏切ったりせず、信用を何より大事にしています。また、仕事においては困った時の助け合いができるチーム力や仲間が存在が大切。一人で仕事はできないため、同業他社さんを含め、仲間の輪があつてこそ仕事が成り立っていると感謝しています。まだ法人化したばかりで分からないことはありますが、たくさん良い先輩方に恵まれているので、その中で気持ちを切らすことなく引き続き向上に努め、また有していないスキルも身につけ、さらに成長していきたいと思っています。

松尾 伴内(タレント)

「真貝社長はとても真摯に自分の人生に向き合っておられ、その生き様に強い共感を覚えました。そしてさらなる高みを目指す意欲も強く、思わず「この人の今後を自分も応援したい」と思わせるところがありましたよ。そうした人間性も社長の大きな魅力の一つですね！」

